

農林水産大臣賞を受賞された生産者を訪ねて

(公財)日本豆類協会

山形県天童市高掬地区^{たかだま}の株式会社おしの農場代表取締役押野和幸さん（61歳）は、令和6年には120haの耕作面積（自作地8ha、借地112ha）のうち水稲99ha、大豆21haに取り組んでおられます。

第53回全国豆類経営改善共励会（主催：全国農業協同組合中央会、株式会社日本農業新聞）では、おしの農場が279kg/10a（過去3年平均313kg/10a）の単収と1等99.5%を確保していること、スマート農業技術の導入を積極的に行っていること（農業の生産性の向上のためのスマート農業技術の活用促進に関する法律に基づく「生産方式革新実施計画」の全国認定第1号）が評価され、大豆家族経営の部において農林水産大臣賞を受賞されました。

日本豆類協会では、令和7年7月14日におしの農場を訪ねて、いろいろな話をお聞きしましたので、ここではその時のインタビューの概要をお伝えします。

訪問前々日の12日には台風5号が発生し、その影響、備えの準備等が心配されたことから、連絡を取り合ったうえで大丈夫との確認を得て出向きました。

お忙しい中にもかかわらず、押野和幸さんのほか、押野日菜子さん（長女、専務）、押野寧々さん（次女）、そして押野由己さん（妻、取締役）に、貴重な時間を割いて対応いただきました。また、山形県村山総合支庁産業経済部農業技術普及課専門普及指導員の布山美恵さんには、当日の対応にご協力いただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

共励会の概要と押野さんの経営概要は、本号の別稿「第53回全国豆類経営改善共励会の結果について」をご覧ください。

事務室兼作業準備室内のミーティングコーナーでお話を伺いました。この建物は令和2年に建てられた厚生施設で、休憩室と、それぞれ男女別の更衣室、トイレが完備されています。和幸さんのお話のなかで特に印象的だったのは「畑作をやりたいかった。」という言葉と「お客さん」の意味でした。

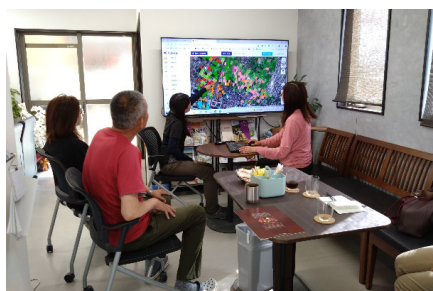
●大豆作への思い

和幸さんは、もともと米農家に生まれ、20代の頃から泥の中で作業をする水田を続けながら畑作へのあこがれ、意欲を持ち続けてきたそうです。そして、この地域の田んぼを引き受け、面積を拡大するなかでこれを水張り（水稲作）だけでこなすことには限界を感じてこられました。小麦を試したこともあるもののこの地域は積雪が多いことから難しく、品質も良くなかったことから途中で断念したとのこと。このことから、機械化が進んでいる大豆に興味を持ち、大豆作業用のコンバインや乾燥機、倉庫などをそろえてきて、いよいよ令和元年に大豆作に取り組んでみたところ意外にこの土地に合っていて面白く、また、大豆にはユーザー（味噌加工業者）がいることも面白いと思う理由のひとつでした。

苦労したのは作り方がわからないことで、近隣に参考になる事例がなかったことから、山形県の試験場や普及指導員の指導のもと取り組んだとのこと。和幸さんは、圃場の排水対策が最も重要で、額縁明渠やサブソイラによる排水を徹底しておられ、それさえすれば何とかなると強調されていました。



令和2年に建設された厚生施設「事務室兼作業準備室」。ミーティングコーナーのほか、休憩室、男女別の更衣室・トイレが備わる



栽培管理支援システム xarvio® FIELD MANAGERのKSAS連携画面を見ながら説明していただきました

●農地集積への思い

押野さん達にとっての「お客さん」はこの地域の、農地を預けてくれる農家です。お客さんが増えて農地面積が増えるのは自分達が評価されている証拠であり嬉しいこと、将来的には面積を150haまで広げ、そのうちの3分の1の50haを大豆にしたいと意欲を語られました。借りた農地はしっかり除草もしてきれいに維持管理し、まわりの水路などは基本的にこちらで除草、泥さ

らいなどをするようにして、お客さんが楽になるようにしたいと考えておられます。このような取組を継続して行っていることが地域からの信頼につながっているのではないかと語られていました。

この面談の途中で和幸さんに電話がかかってきて15分ほど中座されたのですが、後で、今の電話も田んぼを引き受けて欲しいという相談だったとお聞きしました。

●働くモチベーション

おしの農場では、インスタグラムを活用して積極的に情報発信をしています。

日菜子さん、寧々さんは、インスタグラムをやる目的は自分達の農業のことを若い人達に知ってもらいたいからであること、日々の圃場や作業風景などを見て、おしの農場が面白いと興味を持ってくれたら良いこと、そうして評価が上がるのがおしの農場で働いている社員のモチベーションにもなると考えておられました。

日菜子さんはドローンを担当していて、スマート農業に関する情報は早めにチェックしており、良い技術には積極的にチャレンジしたいと語っていました。またドローンなどスマート技術については若い社員も興味を持って自分から進んでどんどん調べて提案してくれると話してくれました。たくさんの米農家がある中で、おしの農場を選んで入社してくれたからには、彼らが「楽しい!」と言って働いてくれることが何より嬉しいこと、少しでも楽しくそして楽になるように働くこと、そのことを考え続けていること、女性ならではの視点から働きやすい職場作りをしたいと、お互いの目を見合わせながら語っていただきました。



4色の作業習熟ボードが各人のスキル向上への意欲喚起。今回の農林水産大臣賞の賞状を掲示



工具ボードを整理して一目瞭然に。農業版“カイゼン”を導入

このようにおふたりの話がはずんできた頃に、大豆を担当するのは主に寧々さんと教えていただきました。

また、由己さんより、社員の中には県外で一般企業に勤めていた方もいて、自分達の知らない様々なことを教えてもらって、おしの農場が働きやすい職場になるように改善していきたいとのコメントもありました。

●スマート農業

みなさんのお話では、栽培管理支援システムは、以前は別のソフトを使っていたが、今はクボタのKSASと連携できることから、BASF社のxarvio® FIELD MANAGERを使っているとのことでした。ヨーロッパのメーカーということもあり、大豆など畑作との相性の良さを感じており、生育ステージの予測など栽培管理で役立っているようです。

これだけの圃場を管理していくには人の頭では無理で、スマート農業があるからできること、ドローンやトラクターの自動操舵などの導入によって、経験が少ない社員でも作業ができるようになってきていること、特に大豆は機械化が進んでいることから、若い社員が多いおしの農場とも作業の相性が良いとのことでした。

和幸さんは、いろいろな技術を導入したい一方で、ダメなものはダメと「なる早で」判断していくことが重要だとも強調され、実際に3年やって見切りを付けた技術の例などをお話しになりました。



大豆作で活躍してきた三連中耕機



大豆作のために導入した五連中耕機。
来期から本格使用

ちなみに、共励会表彰式が開催された6月27日午後、日菜子さんはスマート農業イノベーション推進会議（IPCSA）設立総会（主催：農林水産省および農研機構）において、登壇されています。



大豆作のために導入した
汎用型乾燥機

●これからのおしの農場

日菜子さん、寧々さんは、仕事をするときだけでなくご飯を食べるときなどもずっと一緒にいて、これまで紹介してきた和幸さんの考え方が自分達にも染みついていること、そしてその想いを受け継いでいきたいと語られました。和幸さんは数年後には経営移譲をしたいと考えていること、そのためには何よりも社員の納得が必要であると話していただきました。



6月18日に播種した大豆
圃場(事務所の目の前)
で生育状況を説明する
押野和幸氏。干ばつを
心配し「このあたりにも恵
みの雨が降って欲しい」